No. 5（2011. 9）

武庫川女子大学
武庫川女子大学短期大学部

第５号

FDニュース

● 目　次 ●

〔１〕本年度の活動方針
〔２〕FD 推進委員会の活動報告
　１　FD 公開講演会（2010年度第２回）の報告
　２　2011年度前期の授業公開を終えて
〔３〕学科 FD の取り組み
　演奏学科、応用音楽学科
〔４〕シリーズ授業
〔５〕編集後記

本年度の活動方針

FD 推進委員長　高橋　享子

本学は、２年前の創立70周年に際し、続く80周年に向けた10カ年計画として、男女共同参画時代の５つの戦略テーマを掲げ、「グローバルな視野を持った指導的女性の育成」と「女性研究者の育成」、さらに「本学の特色を活かし、（中略）女性の活躍が求められる新分野を開拓する」こと等を策定しました。

一方、2008年12月中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」では、**学生が「何ができるようになるか」**に重点を置き、各専攻分野を通じて**学士力**の必要性が提示されています。学士力としては、①知識・理解、②汎用的技能（コミュニケーション、情報リテラシー）、③態度・志向性（自己管理力、チームワーク力）、④総合的な学習経験と創造的思考力の４つが挙げられており、教員には学生に学士力が身につく教育及び授業展開を行うことが求められています。

このような学内外の動きを受け、FD 推進委員会では、昨年度より「より良い授業を行う」「学生にとってわかり易い授業を行う」ために、エントリー制による「授業公開」を実施しています。「学生にとってわかりやすい授業を行う」には、授業の技術や方法を工夫するだけではなく、授業の設計・デザインを十分に行う事が必要となります。また、授業を参観することは、授業中の学生の反応、時間配分、資料や機器の使い方、板書、授業の雰囲気など様々な点を参考にでき、自分の授業スタイルを見直すヒントが得られます。さらに、参観される側にとって教職員の参観者からの客観的な授業への意見は、学生の授業アンケートとは異なった視点も得られ、授業を振り返る良いきっかけになることと思います。

「授業公開」２年目となる本年度は、新たに「授業公開」に関する討論会を開催し、意義ある授業公開の今後のあり方について意見交換を実施致します。また、授業改善に学生の意見を反映させるために昨年度試行的に実施した「FD 学生座談会」を新たな企画として本格的に取り組むなど、FD 推進委員会では４月より下記に示す小委員会を立ち上げています。

各学科から選出された FD 推進委員が中心となり、大学・短期大学部全体の FD 活動に取り組んでおり、今後は各学科での FD 活動を活発に展開して頂き、FD 推進委員会の諸活動が組織的な取り組みに繋がっていくことを願っています。

FD推進委員会		
	授業改善・改革委員会	学生の学習を支援することを目的とし、授業公開により参観者との交流を図る。授業公開についての討論会。
	学生・教職員 FD 委員会	授業公開を受け、「よりわかり易い授業」について学生との座談会を実施する。
	FD 講演委員会	学内外の講師による講演会や研究会を開催し、教職員の FD 活動への共通理解を得る。
	FD ニュース編集委員会	学科 FD 活動や FD 推進委員会の活動状況などをニュースにまとめる。
	広報委員会	学科 FD 活動や FD 推進委員会の活動状況などを学内外へ情報発信する。

FD 推進委員会の活動報告

1　FD 公開講演会（2010年度第２回）の報告

2010年度第２回 FD 公開講演会は『現在進行形の FD』と題して、2011年３月２日（水）に山形大学地域教育文化学部の小田隆治先生を講師としてお招き致しました。山形大学では平成20年度「学生主体型授業開発共有化 FD プロジェクト」のテーマで文部科学省教育 GP に採択されており、小田先生はこのプロジェクトの中心となってご活躍されています。FD 界の先駆者であり、他大学でも FD 推進に関するご講演を多数されています。

山形大学では学生による授業評価、公開授業、FD 合宿セミナー、授業改善ハンドブックの作成など多彩な FD 活動が行われています。授業公開については「公開授業と検討会はセットで行われるべき」「授業者をさらし者にしてはいけない」「参観者は学生と一緒になって授業だけに集中するのではなく、授業中の学生の反応を見るべき」など多くの実践例から生まれた課題、問題点を提示いただきました。山形大学で作成された DVD「あっとおどろく大学授業 NG 集」も一部観賞することができ、学生と教員で作りあげる授業の重要性について再認識できる好機でもありました。

時間的な制約もあり講演会参加者との十分な意見交換ができませんでしたが、小田先生の実践経験など冗談を交えながら迫真性ある充実した講演会でした。講演会参加者（136名）による講演後のアンケート集計結果では講演内容について「大変よかった、よかった」が80%、今後の授業の参考について「参考になった」が65%という好評価の回答を得られました。本学での FD 推進につながる有意義な時間を過ごすことができました。　（FD 推進委員　北村真理）

2　2011年度前期の授業公開を終えて

本学の「授業公開」は「普段の授業を気楽に公開し、気楽に参観する」スタイルを重視しています。このことが全学に浸透すれば、各キャンパスにおいて自由に授業が参観でき、自己の授業改善及び教育力の自己点検に取り組むことができるのではないでしょうか。今回の「授業公開」は２年目であり、公開コマ数や担当者数は第１回目（2010年度前期）に比べて増えてきています（表参照）。

７月20日（水）、“意義のある「授業公開」の今後のあり方”と題した討論会を実施しました。本討論会には教職員計51名が参加し、さまざまな意見が出されました。例えば、“授業を公開したが、参観者がいなくて残念であった”という一方で、“参観する意志はあったが、仕事の優先順位の都合で実現できなかった”という意見がありました。参観者がいなかったケースは昨年度もありましたが、討論会での意見を聞くと仕事の都合で参観できなかった教職員が多かったのではないかと推察されます。また、作品発表会や卒論発表会への参観を期待する意見もありました。教員の評価という点については、「授業公開」では“教員を評価しない”ことが再確認されました。その他、各キャンパスにおける「授業公開」のエピソードをはじめ、公開可能な授業の教室には「公開可能カードをドアにつけてはどうか」という「授業公開」の一工夫など貴重な意見もあり、約90分という限られた時間ではありましたが、盛況な討論会となりました。

後期も「授業公開」を実施致します。FD 推進委員会では「授業公開」の改善すべき点（否定的な意見も含め）を議論し、「普段の授業を気楽に公開し、気楽に参観する」ことが全学的に広がるように知恵を出していきたいと思います。今後ともご協力戴きますよう、宜しくお願い申しあげます。　（FD 推進委員　渡邊完児）

学科別公開授業数と担当者人数一覧

		共通	大日	大英	大教	大健	大心	新健	大環	大食	大情	大築	大音	新薬	大康	短英	短教	短人	短健	短食	短生	院健修	合計
H22前期	コマ数	3	1		33	4	7		2	7	1	1	1	1			6		3	1	1		72
	担当者数	2	1		5	2	2		2	6	1	1	1	1			2		2	1	1		30
H22後期	コマ数	1	3	5	10	8	4			4	16	1		43	12			7	4	3			121
	担当者数	1	1	2	2	4	1			3	11	1		18	6			1	3	1			55
H22年度	コマ数	4	4	5	43	12	11		2	11	17	2	1	44	12		6	7	7	4	1		193
	担当者数	3	2	2	7	6	3		2	9	12	2	1	19	6		2	1	5	2	1		85
	実人数	3	2	2	6	5	3		2	8	11	2	1	19	6		1	0	3	0	1		75
H23前期	コマ数	11	1	4	13	9	18	1	4	50	13	4	0	37	11	1			9	10		2	198
	担当者数	1	1	3	1	3	4	1	2	17	12	1	0	22	8	1			3	5		1	86
	実人数	1	1	3	1	3	4	1	2	17	12	1	0	22	5	1			2	1		0	77

（注）合計欄の数値は、重複を含んだ延べ数を表示。

学科 FD の取り組み

演奏学科
応用音楽学科　幹事教授　中村　伸吾

〈音楽を通して豊かな人間性を形成
「音楽ヒューマニズム」を備えた音楽の専門家を育てる〉

音楽学部には演奏学科と応用音楽学科があり、演奏学科には、声楽・ピアノ・ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・フルート・クラリネットといった多様な専修があり、すぐれた演奏家の養成を目指しています。応用音楽学科では、音楽の持つ様々な要素に注目し、音楽の専門知識・技術を社会に応用できる専門家の養成に取り組んでいます。この学科の卒業後の専門領域としては、音楽療法、アートマネジメント（芸術事業企画運営）、音楽の生涯学習等があります。

二つの学科とも、音楽を通じて豊かな感性をいかにひきだし、培うかが重要になっています。演奏者においては、観客とのコミュニケーションが必要となり、アートマネジメントにおいても観客や社会のニーズを敏感にキャッチし表現しなければなりません。また、一つの舞台芸術を作り上げていくためには、さまざまな専門分野や個性を持つスタッフと目標を共有し協力・連携していく能力などが求められます。他方、音楽療法においては、高齢者から子どもに至るまで、また病気や障害を抱えた人々などへ個別のニーズを受け止め、非言語や言語などあらゆる媒体によって対話することができる能力が求められます。

これらの専門性を培うために、一人ひとりの個性を慈しみ発揮できるよう、教員と学生とが一対一で行う個人実技レッスンや、学科や学年などを超えて合同で一つの課題に取り組み、その醍醐味を存分に味わうアンサンブルなど、多様な授業形態を採り入れています。オペラをはじめ総合的な芸術を作り上げるためには、プロの演奏家を招き、じっくり取り組みながら一つの芸術作品を作り上げていきます。

学生たちのエピソードをご紹介します。毎年の文化祭では、有志が集まってオペラを上演し、多くの方に楽しんでいただいています。今年度の文化祭も２年生有志が「サウンド オブ ミュージック」を上演する予定で、現在、練習を重ねています。また昨年度から、音楽でまちの活性化を目指し他大学と連携しながら、有馬温泉でのイベント「有馬湯けむり大学」を企画・運営して好評を得ております。こうした機会は、まさに人と人とをつなげる音楽の力を活用し、社会にいかに貢献していくかということをじかに体験できる大切な学びになると考えます。

学生一人ひとりの力や思いをひきだすためには、授業形態が少人数に抑えられ、学生と教員の距離も近くアットホームで温かい雰囲気の中で学習に集中できることが重要です。学生からは、このような少人数制の利点として、学年全員と親しくなれ、お互いが近くにいるため、切磋琢磨し互いに成長することができるという感想を聞いています。さらに、音楽療法の実習においては、学生個々の進度や目標にあわせたきめ細かな課題を提示しています。それと同時に、個人レッスンを中心とした実技科目については、複数の教員による評価を行うことで、厳正かつ公正な評価を行っています。

現在、情報メディア学科と共に、音楽ドラマを制作中です。今後は、他学科とも様々な交流や活動の機会をますます増やすことで、総合大学の利点を生かし、さらに充実したものになることを目指したいと思います。

2011年度　FD 推進委員会メンバー一覧

No.	役　職	所　属	氏　名	No.	役　職	所　属	氏　名
1	委員長	食物	高橋　享子	11	委　員	建築	大井　史江
2	副委員長	教育	小野賢太郎	12	委　員	音楽	松本佳久子
3	委　員	日文	西山　明美	13	委　員	薬学	西出喜代治
4	委　員	英文	三浦　秀松	14	委　員	共通	西尾亜希子
5	委　員	教育	山口　英樹	15	委　員	教務部	土井　裕司
6	委　員	心福	半羽利美佳	16	委　員	教育	北口　勝也
7	委　員	健康	渡邊　完児	17	委　員	研究活性支援課	菅　榮太郎
8	委　員	環境	井上　雅人	18	委　員	情報システム室	私市佐代美
9	委　員	食物	北村　真理	19	委　員	教務課	玉田　健二
10	委　員	情報	中川　佳子	20	委　員	教務課	中山真理子

シリーズ 授業

「私の授業ディベロップメント」

教育学科
幼児教育学科　准教授　北口　勝也

本学で10年以上担当し続けてきた科目に「教育心理学」があります。この科目は、小学校教諭・幼稚園教諭・保育士のいずれの免許・資格を取得するためにも必修なので、大教の学生は２年次で全員が履修します。「心理学から見た効果的な授業のしかた」を教えるのですから、結構なプレッシャーがかかります。下手な授業をすると「あの先生、えらそうなこと言ってるけど、自分の授業はわかりにくいよね」と陰口を叩かれかねません。私の授業が「効果的」でないと、教師を目指す学生たちにしめしがつかないのです。そこで今回は、私なりの授業ディベロップメント、すなわち、授業を改善するために「授業がうまくいっているか」をどのようにチェックしているかを報告します。

私の授業の効果を測るための指標は３つあります。第１に、学生による授業アンケートです。特に「この授業から啓発されることが多くありますか」「意欲的に出席し、熱心に勉強していますか」という項目に注目しています（図１）。現在の授業スタイルが固まってからの３年間で、全受講者の平均値は比較的高い水準を維持しており、後者については、ほんの少しずつですが毎年上昇しています。学生が感じた成果と意欲が高まるよう、日々工夫を重ねています。

第２の指標はテストの成績です。ご存じのように、大学の評価は基本的に担当者が基準を決めて行う絶対評価です。かつて小中学校で行われていた相対評価のように、Ａは何％、Ｂは何％と決める必要はなく、極端に言えば全員に100点をつけてもよいのです。私の授業が最高にうまくいき、学生たちが全員「教育・保育に必要な心理学的知識と考察スタイル」を身につけてくれれば、受講生全員が満点を取ってくれるはずです。つまり絶対評価における究極の目標は「全員満点」です。図２を見れば、ここ３年の状況はまだそこまでには至っていません。もちろん学生の能力など、関係する他の要因があることは承知していますが、常に昨年の平均値よりは上にいくよう、授業の細部をチェックし改善を続ける毎日です。

最後の指標はやはり学生の生の声です。授業アンケートの自由記述欄、授業の終了時に提出してもらう質問や感想などを見ていると、その日の授業でどこが説明不足だったか、学生たちに誤解させるような表現だったか、がよくわかります。また、日頃の学生たちとの世間話や、たまに研究室に顔を出してくれる卒業生たちとの話からも、自分の授業には何が足りないのか、そしてそれはどのような方法で改善できるのかに関するヒントを得ることもできます。

「やりっぱなし」ではなく、多様な指標を用いて効果を確かめること。これは私が心理学を専門にして身につけてきた態度だと思います。そしてまさにこの「態度」こそ、私が今、目の前にいる若者たちに伝えたいものなのです。

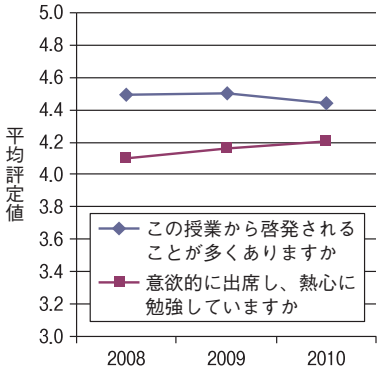

図１．学生による授業アンケートの結果

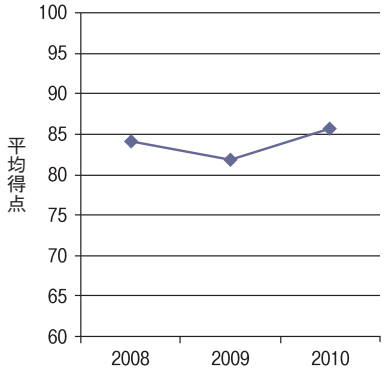

図２．「教育心理学」（大教２年）の平均得点

編集後記

「オニ困る！・オニ大変！・オニショック！」など負の感情を表現する言葉などに「オニ」を付して話す学生がいた。「オニ…」って何？と、聞き返しても笑顔が返ってきただけ。いまどきの学生の言葉風に言うと「全国的に大学では『私語がオニ大変！』状態」ということになる。

今年度、実技を伴う授業で「オニ大変！」を経験するはめになった。受講希望者があふれて、試行錯誤の調整をしたけれども、かしましい授業になってしまう。実技を伴う授業では個別の指導が必要になるため人数を振り分けるなどもっと厳しい対応が必要だったかもしれない。つまり、鬼教師は必要である。なまじ仏の顔をしたばっかりにと、正直後悔の念もある。鬼か仏か。

そして授業時にも鬼教師にならざるを得ない。鬼の継続は大変である。鬼に仏心をもたせて。やっと落ち着いた毎日と思いきや、まもなく前期終了。すぐ後期。　（編集委員 AN）

【FD ニュース編集委員会】西山明美、半羽利美佳、井上雅人、中山真理子